
生きたかった彼女たち

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きたかった彼女たち

【Nコード】

N7573T

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

余命半年と宣告された私と、自分を殺して生き続ける彼女の物語。

桜の花びらが舞う頃。黒い服を着た華奢な彼女は、久しぶりにその場を訪れた。その手には小さな花束と、ビニール袋。

何度目かは分からない墓参り。しかし『彼女』にとっては、これが初めての墓参りだった。

墓の前に着くと、彼女は歌いながら墓の掃除をした。その歌声はとても澄んでいて、綺麗だった。丁寧に慎重に、けれども慣れた手つきで掃除をする。掃除が終わると、彼女は小さな花を活けて、ビニール袋から桜餅を取り出した。

「わたしは小さい花の方が好きだから、地味になっちゃったけど…。あと、アイス以外にいいのが思い浮かばなくて。…春だし、桜餅にしちゃった」

静かにそう言うと、墓石を見つめた。

少し冷たい風が吹いて、桜の花びらが舞い散った。彼女はそれを見て、ほほ笑んだ。

「お花見、できたじゃない。思ってたのと形は違うけど」

言い終えると、彼女は下を向いた。そして歌いだした。綺麗なその歌声は、どんどん震えが大きくなっていく。やがて彼女は歌うのをやめると、震える声で言った。

「今日でわたし、も終わりなんだ。わたしはまた、純として生きていく。もう決めたの。だから、あなたにこうやって会えるのは、今日が最後」

彼女は震える声で、けれどもはつきりとそう言った。それからふっと笑った。泣き出す時みたいに、小さく息を吐いて。

「ね、いつか話したよね。やっぱりわたしは、笑えないみたい」

彼女の目から、大粒の涙がこぼれおちた。顔をあげて、墓石を見ながら彼女はほほ笑んだ。

「凜、わたしはね。大切な人が死んだら、泣くの」

桜の花びらが舞い散る暖かな場所で、彼女は静かに泣き続けた。

「余命、6か月です」

そう言われた時、当事者ってどんな反応するんだろう。泣き喚わめいたり、悲観したり、どうにか治してくれと懇願したり、あるいは自分の運命を否認したりするんだろうか。

余命6か月ですと宣告された私の反応は、「はあ」だった。特に思ったことはない。ああそうですか、の「はあ」。我ながら間抜けな返事をしたと思う。

近頃体調が悪いな、夏バテかなと思って行ってみた病院で「大きな病院へ行ってみてください」と言われ、大きな病院に行ってみたら「余命6か月」。何かの冗談かと思ったが、先生の真剣な顔を見ると本当のことらしい。よくある医療ドラマの告知シーンみたいに自分のレントゲン写真を見せられてここにある影がどうのこうのと説明されたが、素人目にはよく分からなかった。

とりあえず明確なことは、私の命は残り少ないらしい。

幼いころに父が、大学1年生の時に母が死んだ。それから2年もたたないうちに、今度は自分だ。兄弟はいないので、私の家族はこれで全滅。運命の神様も結構皮肉だと思う。

余命半年と宣告されてすぐに、私は大学とバイトを辞めた。入院する気もなければ延命する気もない。残り半年、今まで貯めてきた貯金でのんびりと暮らそうと思った。

私が自分の運命に驚いたり悲観したりしなかったのは多分、生きることになんか執着していないからだろう。夢も何もなくなったらと生きてきて、いつ死んでもいいと思ってた。死のうと思っただことは何回もある。だけど私は意気地なしだった。手首を切ろうとしたこともあるけど、怖くて少ししか切れなかった。血がうつすらとにじんで終わり。それ以上深く切る勇氣はなかった。その傷はあつという間に治ってしまった、今はもう跡形もない。

高いビルを見るたびに飛び降りる自分を想像するけどやったことはない。ネクタイで首を吊ろうとしたけど、少し体重をかけただけで怖くなってやめてしまった。沢山薬を飲むのも考えただけ、胃洗浄が苦しいというのを聞いてやめた。白線の外側で電車を待つけど、その向こうへ行っただけではない。車の前に飛び出すのは、運転手がかわいそうだとかなんとか理由をつけてやろうとしない。運よく事故で即死できたらいいのに、と思つてたくらい。

要するに私は、かなり意気地のない死にたがりだった。

だけど余命6カ月だと言われても、特にうれしくもなかった。気合いを入れずにやっていたゲームがゲームオーバーになつても、悔しくないみたいに。

もちろん私が死んだら、「コンティニュー」なんてできないけれど。

大学に退学届を出した帰り道、私は両親の墓参りに行った。自宅から墓のある寺までは、普通電車で駅5つ分離れている。あまり近くはないけど、遠くもない。通学のために買った定期券で行ける範囲だから、ちよくちよく墓参りに行っていた。だから墓も割と綺麗なままで、今日は掃除する必要もなさそうだった。

「お父さんお母さん。私ね、もうすぐそっち行けるんだって」と報告してみたものの、もちろん返事なんて返ってこない。私はため息をついた。幽霊なんて信じてないし、信じたくもない。だから、墓に向かって話しかける自分はどうかしていると思った。酔っぱらってるのかもしれない、気分が。

帰りの電車を待つために、ホームに立つ。白線の外側に立つ癖。だけでもうこれも、意味のないことだ。

「どうせもうすぐ死んじゃうんだから」
私はあたりを見回した。楽しそうにしゃべるカップル、お年寄り、高校生、大学生。みんな楽しそうに見える。

この人たちは、私がもうすぐ死ぬってこと、知らないんだよなあ。なんで私がこんな目に、とは思わなかった。ただ不思議だった。自分の頭の中を占領している、『私はあと6カ月で死ぬ』という事実を、他の人は全く知らないんだということが。いつも立っている白線の外側。それよりも半歩、前に出た。

別にもういいんじゃないか。どうせ6カ月で死ぬのなら、今死んだって。

今なら飛び込める気がする。遠くの方で、踏切の鳴る音が聞こえ

てきた。電車がくる。後はタイミングを合わせて、一步前に飛び出すだけでいい。それだけのこと。

『電車がホームに参ります。白線の内側…』

私は眼をつむった。電車の音が近づいてくる。あと、一步。

その時、ふいに服の袖をひっぱられた。

引っ張られた感覚に驚いて目を開けた途端、ゴオツと音を立てて目の前を電車が通過した。ああ、飛び損ねた、これで何度目だ。

駅員に止められたんだ。そう思って振り返った。だけどそこにいたのは駅員じゃなかった。

「危ないよ」

そこにいたのは大学生くらいに見える、華奢な女の子だった。身長は私よりも小さくて、150cmちよつとだと思つ。黒髪のショートヘア。黒くて大きな目。白い肌。黒いTシャツにジーパンというラフな格好。

私は思わず、見知らぬ女の子のことを上から下までじろじろと観察した。女の子はそんな私と目が合うと、にぱつと笑った。その笑顔は、まるでひまわりの様なくつきりとした力強さがあった。

「白線の内側で待つてないと、危ないよ」

私は無言で彼女の顔を見た。にこにここと笑っているその顔は作っている感じがなくて、とても自然な笑顔だった。何の歪みもないような瞳。

プシュー。電車がドアを開ける音。冷房で冷やされた車内の涼しい空気が、ホームに流れ込んだ。

私は電車に乗ることも忘れて、彼女のことを見ていた。何故か目が離せなかった。

「乗らないの？」

彼女に訊かれて、ようやく我に返り「…乗ります」と答える。乗

り込むと、彼女が後ろからついてきた。座席は人で埋まっていたので、ドアの近くに立つ。窓の外を眺めていると、彼女は私の横にやってきた。ドアが閉まり、ゆっくりと景色が動き始める。

「止めない方がよかったですか？」

小さな声で彼女に訊かれてぎよっとする。彼女は、私が何をすることもりだったか分かっていたらしい。まあ、だから止めたんだろうけれど。

「別にいいです。もう」

どうせそのうち死にますから、は付け足さなかった。

「あなた、結構よくお墓参りに来てるの？」

そう訊かれて、私はまたぎよっとした。なんでそれを知ってるんだろう。と思っていたら、

「あたしは毎日来てるんだけど、あなたのことよく見かけるから」と言われた。そうだったのか。知らなかった。

しばらく続く沈黙。彼女が窓の外を見ているのに倣って、私も外を見る。遠くの方に見える山、青い稲がキラキラと光る田んぼ、赤色のトマトが目立つ畑。何の変哲もない、夏の田舎の風景だった。

「…あなた、いくつ？」

訊いたのは、彼女の方だった。

「21です」

答えると、彼女はまたにぱっと笑った。本当に、ひまわりみたいな笑顔だと思う。屈託がない、というか。

「同い年だ。よかった。あなたがさつきから敬語を使ってくるからさ、もしかしたらあたしのが年上なのかな？いやもしも、あたしの方が年下だったらどうしようって思ってたんだ」

「そう…ですか」

「うん。だからさ、敬語はやめよ？」

彼女はこちらを見ると、白い歯を見せて笑った。

車内にアナウンスが響く。墓のある寺から2つ離れた駅に着く合

図だった。電車の速度がだんだんと遅くなる。

「あたし、ここで降りるんだ」

彼女はそう言うと、自分の鞆を漁りだした。中からイチゴ味の飴玉を取り出すと、こちらに差し出した。

「あたしの名前は純。あなたは？」

「…凜」

そう言いながら、飴玉を受け取る。ちょうどいいタイミングで、ドアが開いた。

「じゃあまたね、凜」

彼女は手を振りながら、電車を降りて行った。そして電車が動き出して見えなくなるまで、彼女はずっと手を振っていた。

姿が見えなくなってから、彼女に貰った飴玉の封を開けた。赤いビー玉のようなそれを口に入れると、甘酸っぱい味が口内に広がった。

人付き合い…いや、人そのものが苦手な私だけど、何故か彼女のことは馴れ馴れしいとも鬱陶しいとも思わなかった。

それが、私と純の出会いだった。

大学やバイトで知り合った人たちのアドレスを、すべて消去した。もともからそこまで親しい仲でもなかったし、もう会うこともないだろうと思う。少し話しただけでアドレスを交換する、それが友達の場合。削除しても胸が痛まなくらいの、薄っぺらい友達の証拠。私はすっからかんになった携帯のアドレス帳を見て、笑った。

私の携帯に残ったアドレスは本当に遠い親戚のものと、小・中学校の間に親しかった友人一人だけ。けどこの友人は今、カナダに留学している。連絡を取るつもりは、ない。彼女が私の死を知るのは、大分後のことになるんだろう。

いつそ、携帯を解約してしまおうかと迷った。けれど解約しなかった。

なんだかんだいって私も、形だけでも世界と繋がっていたかったのかもしれない。

彼女と再会したのはあれから1週間後、場所は墓地だった。

墓を洗おうと水を汲んでいるとき、後ろから脇腹をつつかれて

「ひゃあ！」

変な声を出して振り向くと、そこにニヤニヤした純が立っていた。

「ひさしぶりー」

立派な菊の花束を手に持った純は、太陽の下で見るとますます白く見えた。

「本当によく来るね、凜は。あたしが知ってる限りでは、これだけ何度もお墓参りに来る若者はあたしと凜くらいだよ。ご先祖様も喜んでるよー、きっと」

うんうんと頷きながら純。そんな純を見て思わず、

「純、仕事とか学校とかは？」

と訊いてしまった。純は首を横に振ると、苦笑した。

「なにもしてないの。ニートみたいなもの」

純は持っている菊の花を、まるでマイクのようにこちらに向けた。

「凜は？」

「私は…私も一緒だよ」

「そっか、へへへ」

二人とも、それ以上何も訊かなかった。

私の家の墓と、純の家の墓は少し離れていた。純が立派な花を供えて手を合わせている様子を遠目に見ながら、私は墓の掃除をした。夏だから、すぐに雑草が生えてくる。私は汗をぬぐいながら、ひたすら雑草を抜いた。じりじりと照りつける太陽に蝉の鳴き声が混ざって、とにかく暑苦しい。

雑草の処理を終えて私がつめ息をついたのと、

「アイス食べない？」

後ろから純が声をかけてきたのは、ほぼ同時だった。

寺の近くにある昔懐かしい感じのする駄菓子屋さんで、アイスを買った。私はバニラ味のスティックアイス、純はソーダバーを選んだ。近くにあるベンチに二人で腰かける。

私のスティックアイスを純はじつと見つめてから、ふつと笑った。

「それ、おいしいよね」

「純もこれにすればよかったのに」

純はソーダバーをかじると、首を横に振った。

「そのアイスが好きなのは、あたしの妹の方なの。あたしはクリーム系のアイスより、シャーベットとかそういうやつの方が好きだから」

シャクシャクとアイスを食べながら、純は綿菓子のように入道雲

を眺めていた。

「純、妹いるんだ」

暑さのせいでアイスが溶けるのが早い。私は急いで食べながら、純に話しかけた。

「うん。実はねー、双子なの。一卵性だから顔もそっくりの」

「へー。ちよつと会ってみたいかも」

「そこにいるよ」

純は食べていたソーダバーを、墓の方に向けた。だけどそこには誰もいない。

「…え？」

「お墓の中。…もう死んだの。子供のころに」

時間が止まったような気がした。蝉が急に鳴きやんで、駄菓子屋の玄関先につるされていた風鈴がチリンとなる音が大きく響いた。

純は先ほどと変わらない様子で、入道雲を見ながらアイスをシャクシャクと食べている。

「あ…。ごめん」

「なんであやまるの」

純が笑った。最後の一口を食べると、ため息をついた。

「もうずいぶん前だよ。10年前。交通事故だった。傷は大したことなかったんだけど、打ち所が悪かったんだって」

食べ終わったアイスの棒を、ポキンと折る。純の顔と声が、少しだけ暗くなった。

「そっか…」

なんて言えばいいのか分からなくなって、私は無言でアイスを食べた。何を言っても、なんの慰めにもならない気がする。蝉がまた鳴きはじめて、騒がしくなった。

「…凜、兄弟は？」

純が明るい口調で訊いてきた。気を遣わせてしまった、と思う。

「いないよ。両親ももう死んでるから、いまは一人暮らし」

「そっかー。だからよくお墓参りに来るんだ？」

「そう」

大学もバイトも辞めてしまった今は、墓参りくらいしかやること
がなかった。

余命を宣告されてから1週間、ほとんど何もせずに過ごした。大
学もバイトもない生活。ゆっくり休みたいとか遊びたいとか色々思
っていたけれど、いざとなってみるとやりたいことなんて何もなか
った。毎日毎日、時間が過ぎるのをただ待った。毎日毎日、自分が
どんどん空っぽになっていくようだった。

だからちよつと外出してみようと思つて、また墓参りに来た。両
親のためというよりは、自分のためだった。

「だけど純は毎日来てるんでしょ？えらいよ」

そう言つと、純は苦笑した。少し困つたような顔。

「ていうかね。あたし、お墓参りの時しか外に出るのが許されてな
いんだ」

「え？」

「お母さんがすつごく過保護でね。大学にもバイトにも行かせても
らえてないし、お墓参り以外の用事で外に出ることは認められてな
いの。だから、墓参りすることくらいしか気分転換できるものがない
んだよ」

「冗談でしょう？と言おうとしたが、純の顔を見て辞めた。少しだ
け悲しそうなその顔は、その話が本当だと物語っていた。

「お墓参りに行くふりをして違うところに遊びに行くことだつて、
本当はできる。…もうさ、二十歳も過ぎてるし、家を出ることだつ
てできるのは知ってるんだ」

純は立ち上がり、また空を見上げた。

「だけど私は、出ようとしらないの」

青い空の中を、大きな鳥が飛んでいた。

そのうち私は、毎日墓参りに行くようになった。墓参りに行ったら絶対に純に会えるから。雨の日でも墓参りに行った。そして近くにあるお寺で雨宿りしながら、いろんなことを話した。

純は本当に、ひまわりみたいな人だと思う。私はあつという間に純に惹かれた。彼女は魅力的だった。明るくて、優しく、知的で、ただ、何故か彼女には影が見えるときがあった。何かを抱えこんでいるような、暗い影が。ひまわりは花が大きければ大きいほど、少し下を向いただけで大きな影ができる。

だけど彼女は少し影を見せた後は、いつも綺麗な顔で笑った。私は彼女の笑顔に惚れてるんだと思う。彼女が笑ってるのを見ると、自分の心も少し軽くなるような気がした。

けれど私は、いつか彼女に言わなければならない。

「ここってさあ、春になったらすっごい綺麗だよ。桜が咲いて」
緑の葉っぱがキラキラと光っている木を見ながら、純が笑った。
今日は珍しく、彼女はバナライスを食べている。いつもはクリーム系のアイスなんて食べないのに。彼女にそう言ったら、「たまには違うのも食べたくなるんだよ」と言って笑った。

純はおいしそうにバナライスを食べながら、緑の葉っぱのように目をキラキラさせた。

「ね、来年さー。お花見しよー！ここで」

「ええ！？墓地でお花見！？」

笑いながらアイスを食べる。食べるふりをする。そうやって、自分をごまかす。

多分私は、来年桜が咲くころにはもうここには来れない。
それをいつか、彼女に言わなければならなかった。

良かったのは、彼女に出会えたこと。悪かったことは、彼女に出
会ってしまったこと。

私はいつの間にか、死にたくなっていた。

死にたい、と思うことが少なくなっていた。むしろ勿体ないと
思った。彼女と、純という時間は楽しい。今まで上辺だけの友達し
か作らなかつた私が、初めて心の底から笑いあえるような友達を作
れた。いや、友達になつてくれたんだ、純が。

死ぬのが怖いとか嫌だとか、そんなことは思わなかつた。ただ、
勿体ないと思った。もう少しだけ、長く生きれたら。あるいは、も
っと早くに彼女に出会えていたらよかつたのにと思う。

「まだ死にたいって思ってる？」

彼女の声はとても静かだった。駅に向かう途中で急に雨が降り出
し、シャッターの閉まっている文具店のひさしの下で、雨宿りをし
ているときだった。

「え？」

純はまっすぐに前を見ていた。視線の先には、路肩に停まってい
る軽トラック。それを見ているのか見ていないのか、とにかく彼女
は前を向いていた。

「…将来のことを話すたびに、凜の顔がちょっと曇る。暗くなる。

だから」

彼女の声は透き通っていた。その言葉には、透明な感情が込められていた。私には、それが悲しみなのか、怒りなのか分からなかった。

「自分で死ぬ気は、ないよ」

彼女と同じく、前を見ながら小さな声で呟いた。何故か大きな声では言えなかった。

「でもね、私はもうすぐ死んじゃうんだ」

純がこちらを見上げたのが分かったけれど、私は純の顔を見れなかった。

「病気なの。もう、治らない。だから私、…長くは生きられないんだ」

なるべくさらっと言うつもりだったのに、途中でつつかえて、声が震えた。

ひさしを叩く雨の音が頭上で響く。私はそっと、純の方を見た。

彼女の目は震えていた。だけど、泣かなかった。

「…そうだったんだ」

声に、悲しみの色がついた。だけど同情とか憐れみとか、そんな声ではなかった。彼女は大きなため息をつくとき、パツと上を見上げた。

「言つとくけど、あたしは泣かないよ」

その声は思いつきり震えていた。私は自分が今、どんな顔をしているのか自分でも分からなかった。もしかしたら、泣いているのかもしれない。

「まだ凜は生きてる。だから諦めないし、泣かない。凜が死んじやつても、泣かない」

純がゆっくりと、顔をこちらに向けた。その眼はまだ震えていた。

「ただ、私の顔をまっすぐに見つめて言った。」

「凜が死んだら、あたしは凜のお墓の前で笑うよ。にこにこしながら手を合わせる。そっちの方が、あたしらしいでしょ？」

私は笑った。彼女は強い。そして、強がりだった。

「そうね。そっちの方がいい。そうしてほしい」

私の墓の前でひまわりのように笑う、純の姿を想像した。

私はその姿を見ることは、ないけれど。

自分の友達が、…凜がもうすぐ死ぬんだって分かった時、あたしは一瞬「純」じゃなくなつた。久しぶりの感覚だった。一瞬だけあたしは、「わたし」になつた。

いつの間にか、彼女のことを好きになっていた。恋愛感情とかそういうのじゃない。説明しろって言われると分からないんだけど、友情以上の感情。

多分、許してほしいんだ。そして、気付いてほしい。彼女ならそうしてくれるんじゃないかって、期待してるんだきつと。勝手に。

「ただいまー」

なるべく明るい声で、玄関を開けた。雨に濡れていたの、タオルを取りに洗面所へ向かう。その間ずっと、奥の部屋から「純、純」と呼んでいる母の声が聞こえていた。

タオルで頭を拭きながら、寝室のドアを開ける。ベッドの上の母は、私の顔を見て安堵の表情を浮かべた。

「おかえりなさい。遅かったから心配してたのよ？まあ、びしょ濡れじゃない」

「…うん」

「あら？どうしたの、それ」

母に言われて、自分の手元を見る。

雨が降る前にいつもの駄菓子屋で買った、アイスのゴミだった。

それを見た瞬間、しまったと思う。ゴミ箱に捨ててくるのを、すっかり忘れていた。

母は首をかしげながら、笑った。

「純がバニラアイスだなんて、珍しい」

「そうだね。これは、翠すいが好きだったアイスだもんね」

そう言っていると母は一瞬だけ顔を曇らせた。それからふっと笑顔を作ると、

「そんなこと、よく覚えてたわね。純は本当に優しい子」

と、かすれた声で言った。

「。。。」

私は無言で、アイスのごみを握り潰す。

失敗した。今度から気をつけないと。

その日、純は沢山のお供え物や、立派な花を持ってきていた。

「今日はね、翠の…妹の命日なんだ」

「そつか。…ね、妹さんって、どんな子だったの？」

「鈍臭い子」

純は思い出したように、笑った。

「動きはとろいし、すぐ泣くし、ドジだし。いつもあたしの後ろをひつついてきてた。あたしはそんな翠が放っておけなくて、いつも翠と遊んでたの」

「へえ…。正反对ね、純と」

「よく言われてた」

純はそう言うのと、墓を丁寧に洗いはじめた。まるで生きているものを扱ってるみたいに丁寧に、墓石を拭いている。

「あたしはね、学校の成績は結構優秀だったんだけど。翠は逆ね。音楽以外はアヒルさんだった。その代わり、歌うのはすぐくうまかった」

懐かしそうに笑いながら、純は墓石を拭いていく。それを見ながら、私は純に言った。

「ね、私も手伝っていい？いつもおねーさんにはお世話になってるし、翠ちゃんに挨拶したい」

それを聞いた純は一瞬だけ戸惑ったような顔でこちらを見た。何かまずいことを言っただろうか、と思っっていると

「…いいよ」

薄い笑顔で、純が答えた。

純が墓石を拭いているので、私は周りの雑草を抜くことにした。

純の話聞く限り、妹の翠ちゃんは私に似てるかもしれない。そんなことを考えながら、ちまちまと雑草を引っっこ抜いていく。純は

何か考え事をしているようで、真剣な顔で何も言わずに墓石を拭いていた。

墓石の近くに生えている雑草に手を伸ばした時、私はそれを発見した。

ズラリと刻まれている、純のご先祖様たちの名前。その一番端。

その名前は、

『純』

「…え？」

上を向くと、純と目があった。とても悲しそうに顔をしている、純と。

「…純？」

私はもう一度、墓石に彫られている純という文字を見た。享年11歳。

何度見ても、それは、純で。

「そっだよ」

困惑している私に向かって、純は笑った。いつものような明るい笑顔ではなく、暗い影を宿した瞳で。

「わたしは、純じゃない。わたしの本当の名前はね、…翠なの」

「交通事故で死んだのは、純の方だった」
彼女は、低い声で話し始めた。

「姉さんはね、すごく素敵な人だった。なんでもできるの。勉強も、スポーツも。性格は明るくて、魅力的。同じ双子だとは思えないくらい」

話しながらも、彼女は両手で花を供えていく。

「姉さんが死んだ時、一番ショックを受けたのは母だった。母は、姉さんを…姉さんだけを愛していた。姉さんが死んでから、母は泣き続けたわ。何日も何日も泣き続けて、自殺までしようとしたこともある。それくらい、母にとって姉さんは大切な存在だった」

彼女は、私の方を見ていなかった。墓石の方も見ていなかった。何もなかったところにある、彼女にしか見えない何かを見ていた。

「そしてある朝、母はわたしに向かってこう言ったの。『おはよう、純』って」

そう言うと、彼女は嗤^{わら}った。その笑顔は、純のものではなかった。「母にとってはね、死んでも良かったのは鈍臭かった翠の方なの。純は大切だった。だから母は、わたしのことを純だと思いこんで、死んだのは翠^{すい}ってことにした。そういう魔法を、母は使った」
笑っちゃうでしょ？と言って、彼女は笑った。私は、笑えなかった。

「父は何も言わなかった。見て見ぬふりよ。わたしは、もしも姉さんが死んだという事実を母が再び目の当りにしたら、そしたらまた自殺してしまうんじゃないかって怖くて仕方がなかった。だから、翠としての自分を殺した。わたしもね、自分が純になる魔法をかけ

たの」

その声には、何の感情も感じられなかった。ただただ、思い出したことを声にしてしているだけのようだった。

「勉強もスポーツも。見えないところで頑張ったわ。姉さんみたいにできるように。性格は明るくて、笑顔で、優しい子で。そういう子になりきった。中学を卒業した途端、母は私を家から出してくれなくなった。母はね、足が不自由なの。だから一緒に出かけることもできない。自分の手元に『純』を置いておきたくて仕方がなかったのよ。一度失った『純』を、再び失うことを恐れた。だから家に閉じ込めようとした」

蝉の鳴き声がうるさいくらい聞こえている。彼女の声はか細く、かすれていたはずなのに、何故か蝉の鳴き声よりも大きくはつきりと聞こえた。

「家にいるとね、翠と呼んでくれる人はもう誰もいない。学校の友達とも連絡を絶ったわ。そうしてわたしは完全に、『純』になった。…だけどね、外の空気は吸いたかったの。だから翠の墓参りに行く優しいお姉さんのふりをして、毎日ここに来た。それだけ」

彼女はそこまで言うと、いつもの笑顔を作った。純に、戻った。

「滑稽でしょう？わたしは自分を殺してでも、母には生きていてほしかった。そして、『翠』を殺して『純』の偽物になってでも、わたしはこの世界で生きていたかったの」

身体にまとわりつくような、生ぬるい風が吹いた。彼女は私の方を見ると、

「なんか空気が重くなっちゃったね。ごめんね」

と少し明るい声で言った。その声のトーンも、笑顔も、私の知っている『純』だった。だけど、

「翠も、生きてるのね」

私は彼女の瞳を見つめながら言った。その瞳には、純にはない影があった。

「そうだね。わたしは翠も捨てきれしていない。本当の翠を隠して、純として生きてる。わたしは何者なんだろうね。ほんと、ゴチャゴチャ……」

そう言い終わると、その影を隠すように彼女はうつむいた。小さな肩が震えている。私は持ちっぱなしだった雑草をゴミ袋に入れると、立ち上がった。

「私はね、『あなた』のことが好きだよ。純でも、翠でも」
彼女が顔をあげた。目は赤く充血している。

「だから私の前では、純でも翠でも、どっちでもいい。自然なあなたでいてほしい」

彼女の顔が歪んだ。泣き出しそうになるのを必死にこらえて、彼女は笑ってみせた。

「純はね、何があっても泣かないんだよ。だから、あなたが死んでもきつと泣かない」

「翠は？」

私が尋ねると、彼女の表情が一瞬だけ消えた。

「…分からない。いままでずっと、翠としての自分は押し殺してきたもの」

そう言っただけでまた笑った彼女は、純を演じることに必死になっているように見えた。

彼女は『わたし』に気付いてくれた。久しぶりにわたしは、わたしの名前を呼んでもらえた。

そして彼女は、わたしのことを許してくれたんだと思う。偽りだらけのこの姿を、彼女は認めてくれた。

わたしは自然な自分を、彼女の前に少しずつ出すようになった。それでもわたしはやっぱり、純として生きようとしていた。

それは彼女も知っていた。けどもう、何も言わなかった。

わたしはきつとこの先、純として生きていくのだと思う。彼女が死んだら、わたしの中にわずかに残っていた翠も死ぬ。そんな気がした。

冬、私の体調が悪化し始めた。私は痛む身体に鞭打って、いつものように墓参りに行った。彼女は先に来ていて、こちらに向かつて笑顔で手を振ってきた。黒のジャケットに、灰色のマフラー。厚着をしても、彼女はやはり華奢だった。

「凜!!」

彼女は私の名前を呼ぶと、いつもの笑顔で近づいてきた。その笑顔を焼きつけるように見る。彼女の笑顔は、本当に綺麗だった。

「大丈夫？ 顔色悪いけど」

「…うん」

私は近くにあったベンチに腰掛けると、言った。

「多分、もうここには来れない」

彼女の顔が歪んだ。私の一言で、すべてを悟ったようだった。悲しさを押し殺すかのように、彼女は明るい声を出す。

「それじゃあ、美人なあたしの顔を最期の思い出としてしっかりと行つてね！」

「あはは…本当に」

私は笑いながら、彼女の顔を見た。もうちょっと彼女のそばにいられたらよかつたのに、と思う。私が死んだら、彼女はまた『純』として生きていくんだろう。

いつの間にか、彼女は私の居場所に、そして私は彼女の居場所になつていた。

「次会うときは、多分私はそこにいるから」

私は、自分の家の墓を指さして言った。最期の入院先を彼女に教えるつもりはなかつたし、彼女も訊こうとはしなかつた。

彼女は墓の方を振り返つて、困つたように笑つた。

「何か供えて欲しいものはある？アイスは溶けちゃうからあげられないけど。立派な花ならちゃんと持っていくから…」

「純は来ないで」

私がそう言うと、彼女の顔が曇つた。その顔を見て、私は笑う。今の自分にできる、精いっぱい笑顔で。

「純じゃなくて、翠に来てほしい。初めの一回だけでもいいから」
それを聞いた彼女は一瞬驚いたようなそぶりを見せてから、眼を細めて笑つた。

「…分かつた」

その眼から涙が一粒、零れて落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7573t/>

生きたかった彼女たち

2011年6月10日11時41分発行